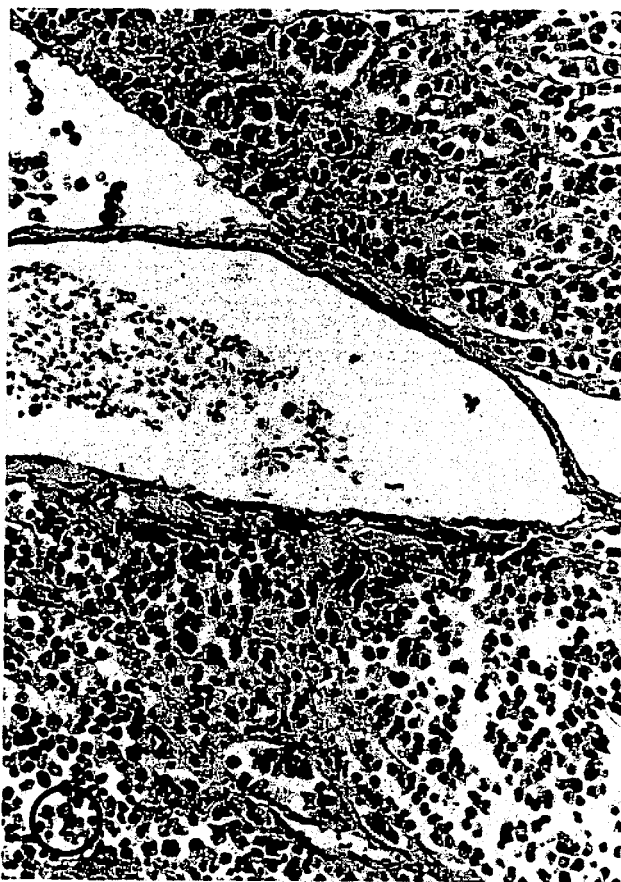
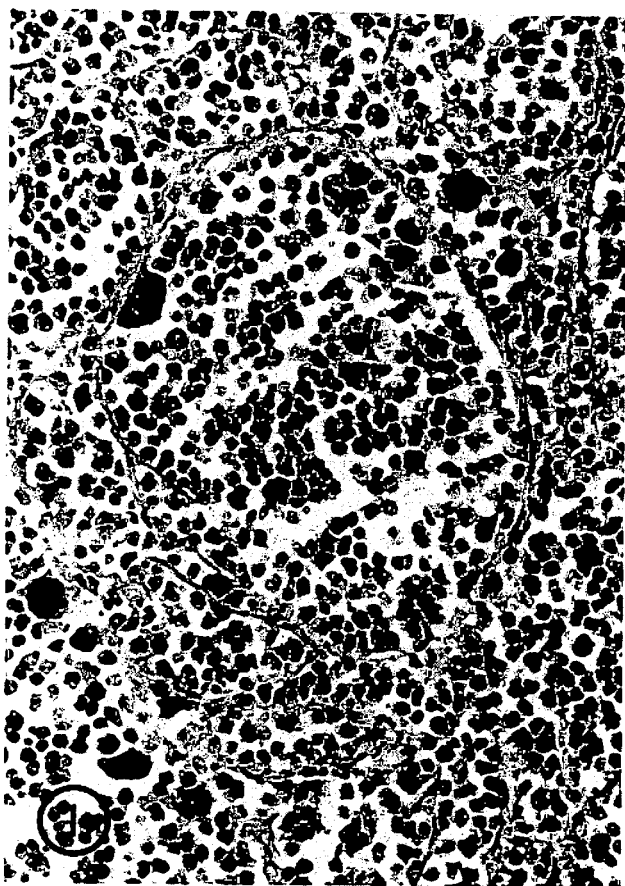


黒鳥の腹腔内腫瘍

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第25回獣医病理学研修会標本No.439



動物：黒鳥 (*Black swan, Anatid nigricans*)。

臨床的事項：山口県宇部市の常盤公園で飼育されていた。昭和59年3月、歩行困難に陥り、良化の見込がなかったため、め廃用にされ、殺処分、剖検を依頼されたが、歩様以外には外見上わるいところはなく、元気も良かったので、解剖場の一隅で飼っておいたところ、7月19日に斃死した。

剖検所見：腹腔内臓器を取り除くと、第6～7胸椎内側に腫瘍が2個付着していた。左は約10×5 cm、右は約6×5 cmで長球状、表面はいずれも赤色を混じた黄白色、滑沢で、僅かに凹凸があった。剖面は黄白色、均質で小分葉状であった。腎は両側とも前部約 $\frac{2}{3}$ は黄白色新生物で占められ、先端部は腫瘍との境界が不明瞭であった。肝は全体暗赤褐色で、直径約5 mmの円形白色斑が4ヶ所、散在性に認められた。これら白色斑は剖面でも略円形で内部に及んでいた。

組織学的所見：腫瘍は全体に稜状組織で区画された細胞集簇巣で構成されていた。集簇巣の大きさは不定で、著しく大きなものでは細かい間質組織で細分されていた。大きな集簇巣では細胞が密で、中心付近に壊死巣がしばしば

観察された。腫瘍中広い割合を占める中程度均等の大きさの細胞集簇巣からなる部分は健全な精巣に類似していたが精上皮および精子成熟の各段階は全く見られなかった。集簇巣を形成している細胞は円形または多角形で、細胞境界は不鮮明であった。核は比較的明るく、核小体は明瞭であった。細胞質は中等量で赤染するものが多かったが、不明瞭なものもあった。2核または数個の核を有する巨細胞がしばしば認められた(写真1, HE×280)。これら巨細胞は形態学的に集簇巣を作っているものと同じ由来の細胞を考えられた。細胞集簇巣間小管内に精子の集塊があり(写真2, HE×200)、集簇細胞間隙にも僅かに認められた。

腎では同様の細胞が包膜から浸潤性に実質内に増殖していた。巣状構造は明らかではなかった。肝の白斑部も腫瘍内と同様の細胞が増殖し、転移巣と考えられた。

電子顕微鏡で観察すると、腫瘍細胞内に尖体構造は認められなかったが、細胞質に真直な短い軸状物がしばしば観察された。

病理組織学的診断：肝、腎への転移がみられた精細胞腫。